



神社界におけるいはゆる専業神職は依然少数派のはずだ。多くは、神主のほかに生業を得て、自らとその家族の暮らしを支へてゐる。理由は簡単、「神主だけでは生計が成り立たないから」といふ辺りに落ち着く。すでに幾度か述べたやうに筆者もまた二足の草鞋、二つの務めで身を立ててゐる。誤解を恐れずに言へば、博物館学芸員(地方公務員)としての日常と神主としての非日常を生きてゐる。かつて、こんなことがあつた。酔つた席上である氏子さんから

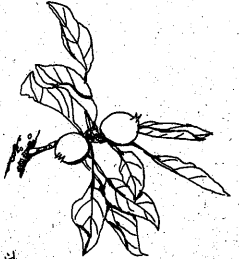
錦田 剛志

「禰宜さん、あんたは本業と副業があつてお金には苦労ないねえ、うちやましいねえ、だいたいどっちが本職かね、かう問はれたことがある。〈何たる無礼者にして世間

天職と本職

知らず……しかし、待てよ、世間の認識とはこんなものかも。まして他人の懐具合など知る由もなし。本業と副業？言はれてみれば、果たして神職はどっちなのか。自問自答して一呼吸した。

こまびや



浅慮のうちに飛び出した言葉は、

「どちらも本業だわね。言つてみれば天職と本職だけ。天職は神さんから与へられたもの、本職は自分で選んだものだわね」だった。

続けて「あのねえ、言つとくけど暮らしぶりは極めて多忙、裕福どころか借金あるんだけどなあ。一体、この田舎神主がどれだけ身銭を削つて御奉仕してゐるのかわからないでせうに……」と、さすがにこの愚痴だけは口に出せず言葉を呑んだ。

のちに、この時発した言葉がどうも忘れられなかった。

自画自賛と嘲笑されるかもしれないが、「天職と本職」とは、なかなか言ひ得て妙ではないか。

事実を赤裸々に語らう。筆者が神社への御奉仕によって得られる経済的利潤は年間を通じてほとんどない。装束や調度品の補修、新調、祭典費、神社関係の各種交際費等にはほぼ全額、いやそれを上回る支出が生じてゐる。されば生活の糧はどこで得るか、他ならぬ公務員の俸給である。これすなはち本職たる所以である。ならば、神主をなにゆゑに続けてゐるのか、こんな割りに合はない仕事も無からうに。いや、そこが私の生き様にとって肝心要である。

つきなみな言葉だが、たとへ経済的に辛苦をなめても、神々のため人々のために奉仕する「なかとのもち」といふ誰でもが経験することのできない心豊かな生き方がそこに

ある。目に見えない力、何かの御縁で社家に生まれ、かうして祖先の歴史をいまに背負つてお祭りさせていただけ。天命と思へば、これほど不思議で、かつまたありがたくも誇らしいことはないのではないか。そもそも、かくのごとき「綺麗事」を真摯に語ることでできる仕事は憂き世にさうさう有りはしまい。筆者が神主を天職と胆に銘ずる所以である。

にしがた つよし 信根・立虫神社万九千社神自

天職と本職と………混迷する時代の中で幾多の試練に直面し、世俗に惑ふこともあらう。しかし、我々兼業の神主は、今日かうして心安らかにお祭りできる天職の幸せ、喜怒哀楽を道連れに社会の中で仕事できる本職の幸せ、この二つの原点を忘れずに歩みたいものである。多忙を極める日々

の暮らしに、その生き様を自問自答する余裕と神主としての誇りを決して失ふことのないやうに。